美作市立美作北小学校　令和5年度　　学 校 評 価 表

ミッション	今を大切に生き、将来に希望をもって心豊かにたくましく生きていこうとする子どもを育てることで、保護者や地域の大きな期待に応える。

評価計画			自己評価（12月）				学校関係者評価（2月）		改善計画
	目標	目標達成の為の方策	達成値	達成率	評価	成果と課題	2次評価	学校関係者から意見	改善案
確かな学力の育成	重点 Ⅰ ・学力向上のためのアクションプランを実行 ・基礎的な知識・技能の習得	・朝学習や放課後補充学習の時間を使っての前学年と現学年の復習実施 ・絶対的基礎学力検定を行い、基礎基本の定着度を確認 ・家庭学習習慣の促進	児童⑥毎日、宿題や自主学習をしている。 保護者⑩子どもは、家庭学習の習慣がついている。 職員１－①「朝の学習」や「放課後補充学習」は計画通りにできたか。 職員１－③絶対的基礎学力の習得が図れたか。 職員１－④家庭学習（宿題）の定着が図れたか。	##	A	児童の質問「毎日、宿題や自主学習をしている」に対する回答は、肯定的評価が92％で、低学年のうちから取り組む習慣が身に付いている。しかし、保護者の質問「家庭学習の習慣が身に付いている」に対する回答（肯定的評価72％）については、児童と大きな開きがある。今後も宿題提出については、しっかり認めつつも、取組方の内容については、保護者の理解を得ながら、低学年のうちからお知らせをしていく必要がある。 朝学習や絶対的基礎学力検定の取組については、基礎的学力の定着を図るため、計画的に新出漢字を学習したり、漢字や計算などの検定を行ったりすることができた。検定については、3学期（2月）も取り組んでいく。	A	【小林】・先生方がなんばっています。このまま継続でお願いします。 【箕作】・9は気にしなくて良い。児童は自分の学業進捗度合が理解不足、保護者は中高生になると学業について行けないが、小学生には優越感を持っているのだろう。・基礎は最も重要で、学業の取得認知度は10分くらいの小テストの繰り返しが効果があるのではないか。授業は、遅れが出ないよう注意が必要。一度遅れると回復が難しいので、要注意。 【寺元】・保護者の理解を得ることはできている。継続的な復習実施。 【甲田】・朝学習や放課後補充学習での復習もですが、夏休みや毎日の自学でもプリントを持って帰ってくることが良い。 ■先生方ががんばっている姿を参観することができました。基礎学力の定着については、保護者の理解を得る上でも、継続して朝の学習や算数補充学習を工夫しておこなっていただきたい。学年が上がるにつれて、学習に関わる保護者の理解度が下がってくるので、できない学習の積み残しや学習の遅れなどが起きないようにして欲しい、期待しています。	【小林】・岡山型PBLを参考にしみまきたPBL」を作ってもらいたい。 ・先生の専門性、特性が発揮できるよう必要なときは、教科や学年を越えた校内体制にしてほしい。 【綱澤】・特色ある学校作りの視点に立って実行することにより、先生への負担軽減も図れる。放課後を利用し、学力定着を考えてみてはどうか。 ■来年度も、今年度と同様、目指す子ども像の育成を授業の中で行えるよう、授業改善に重点を置いて取り組んでいく。それを校内研究の主たるテーマに位置付けて全職員で取り組んでいく。 基礎学力の定着の取組については、朝の学習を見直し、修正を加えて継続していく。 「主体的・対話的」で深い学びに向けた授業作りについては、全国・県学力状況調査と学力定着状況確認テストの結果を踏まえた授業作りを全職員で取り組んでいく。
	Ⅱ ・「主体的・対話的」で深い学びに向けた授業づくり	・児童に考えさせたり話し合わせたりする場と時間が確保された授業づくり ・ICT機器の有効活用（クロームブック・プロジェクター） ・研修3部会制を生かした授業研究の推進（国語部会・算数部会・特別支援部会）	児童③授業は、楽しくわかりやすい。 保護者④子どもは、授業がわかりやすいと言っている。 職員１－⑥授業で考えさせたり、話し合わせたりする場と時間を保障できたか。 職員１－⑩日々の授業において、研究テーマである「ともに学び続ける集団をめざして」に沿った実践をすることができたか。 職員１－⑪ICT（Chrome book・プロジェクター等）を効果的に活用した授業を行うことができたか。	##	B	「主体的・対話的」で深い学びに向けた授業づくりをめざし、研修では3部会制を生かして授業研究の推進を行ってきた。児童に考えさせたり、話し合わせたりする場と時間の確保は行っているものの、深まりというところまでは至っていない状況がある。また、保護者の質問「子どもは、授業が分かりやすいと言っている」に対する肯定的評価は69％で、児童と比べて20％程度低い。保護者は、児童が十分理解できていないまま家庭に帰り、学習に取り組んでいる状況を見られているのかもしれない。 今後も児童が分かりやすいと感じる授業作りに向けて、クロームブックやプリントを活用してドリル的な学習を進めたり、学習の導入（課題の提示）を工夫したりするなど、授業改善をしていくことが必要である。	A	【綱澤】・基本的学力は、低学年において、学力を身に付けていないと学年が上がるにつれて、ついていけなくなる。当然教員は、40人の学級を維持しないといけないので、加配に頼ることになる。 ・中学年においては、対応策としては難しいが、放課後学習をグレードアップしたものを導入してはどうか。 【甲田】・クロームブックを一人１台持たせることで、自主的に学ぶことができている。 ■「主体的・対話的」で深い学びに向けた授業づくりについては、一人一人が課題に向き合えるように加配をしてくださっていてありがたい。今後も学びを保障する上でも加配をしていただきたい。クロームブックの活用にも工夫を凝らしてくださっているので、調べ学習やまとめの学習において、主体的な姿を見られる。今後も、さらに活用した取組をしてもらいたい。	
思いやりの心の育成 豊かな心	重点 Ⅰ ・自己有用感を持って、自治的能力を発揮できる児童の育成	・存在感を感じることができる学級づくりの研修実施（i−check） ・自治的能力を身に付けるための指導のエ夫（委員会活動やクラブ活動、縦割り班活動や係活動）	児童⑩自分にはよいところがある。 児童⑪（3年生以上）自分の役割を持ち、学校や学級で友だちの役にたつことができている。 保護者⑦子どもは、自分には良いところがあると思っている。 職員２－①学級活動や委員会活動、縦割り活動などの中で、自己有用感を実感できる場や機会の設定ができたか（行事等を通しての非認知の取組も含めてお答えください。） 職員２－④学級活動（話し合い活動・係活動）や委員会などで、児童が自治的能力をつけることができるような工夫や指導ができたか。（学級・学校生活をよりよくするための話し合い） 職員５－①校内研修などで自己の学級経営・指導方法についての研鑽ができたか。	##	A	児童の質問「自分には良いところがある」に対する肯定的評価は81％、保護者の質問「子どもは、自分には良いところがあると思っている」に対する肯定的評価は84％とほぼ同程度の結果だった。これは、昨年に比べてどちらも上がっている。学校では、運動会や学習発表会などの行事の際、全校で非認知能力の視点を盛り込んだ自己評価を取り入れて行ってきた成果と思われる。 また、職員の質問「学級活動や委員会活動、縦割り活動などの中で、自己有用感を実感できる場や機会の設定ができたか」に対する肯定的評価は76％だった。来年度も自治的能力を発揮できるように委員会活動や縦割り班活動の改善を行っていく。	A	【小林】・日々の積み重ねの対話が必要だと思います。 【寺元】・いずれかの場所で自分が輝くことができる、自信が持てる場所を作れる。 ■子どもたちは登校してあらゆる場所において、いろいろな力を発揮しているのだと思う。その力を学習や休み時間等の場で発揮できるように、先生方からも子どもたちに対話をしてもらいたい。子どもたちが輝くことができ、自信がもてる場作りをしてやることで、自己有用感をもてるのではないかと思う。	【小林】・PTA体育や学校行事で地域の方ができることは、任せてみる。（グラウンドのライン引きや車の誘導など） ・子どもの非認知能力を向上させるような声掛け。 【甲田】・いじめ問題はとてもデリケートな内容だが、道徳の授業などで、もう少し取り組んでもらいたい。
	Ⅱ ・助け合いや思いやりの心の育成 ・自他の生命を尊重し、道徳性の高い児童の育成	・助け合いや思いやりの心を実践に生かせる場の設定（縦割り掃除・縦割り遊びなど） ・道徳の授業における「生命の尊さ」「友情・信頼」などの内容項目を複数回実施 ・他者への意識を高める生活指導	児童⑨友だちと助け合いができている。 保護者⑥子どもは、友だちと助け合うなど、思いやりのある子に育っている。 職員２－①一人一人のよさを認め合う活動を設定できたか 職員２－③学級活動や委員会活動、縦割り班活動、二言あいさつ等の取組を通して、児童が積極的に他者に関わる場を設定できたか。 職員２－⑤道徳の授業で「友情」「生命尊重」などの内容項目を複数回実施できたか。	##	A	児童の質問「友だちと助け合いができている」に対する肯定的評価は95％、保護者の質問「子どもは、友だちと助け合うなど、思いやりのある子に育っている」に対する肯定的評価は92％と高い。学校では、運動会や学習発表会などの行事の際、非認知能力の視点を盛り込んだ自己評価を取り入れて行った。行事への取組方や友だちの取り組む様子を振り返る場面を作ることで、友だちの頑張りを紹介したり、次時への目標を設定したりするなど、教師の振り返りにも生かすことができたのは良かった。 しかし、委員会活動や縦割り班活動等の取組を通して、児童が積極的に他者と関わる場の設定については、感染症などの影響により取組の回数が不十分で、課題が残るものとなった。	A	【箕作】・徳器の成就が大事。 ・道徳会（子どもに朗読させる）一冊を時間が短くても良いが、継続して行う。 【甲田】高学年が低学年と休憩中にいっしょに鬼ごっこをしたり、話をしたりしているそうで、学校全体で思いやりの心を育てられていると思う。 ■集合場所や通学路での子ども達の様子を見る限り、子ども達の人間関係は良好のように思える。学校教育の成果と感じる。授業参観をした時も、子ども同士で教え合う姿がよく見られたり、休み時間の様子も高学年が低学年と休憩中にいっしょに鬼ごっこをしたり、話をしたりしているそうで、学校全体で思いやりの心を育てられていると思う。	■担任が児童一人一人の思いを受け止められるように、今後も学級経営案のあり方についての研修を継続していく。「非認知能力」を高める取組として引き続き「運動会」と「学習発表会」等では「学びのノート」の取組を全校で行う。 異学年交流については、高学年がリーダーシップを発揮できるよう、縦割り班を活用した異学年交流の場をさらに増やしていきたい。 道徳についても「生命の尊さ」「友情、信頼」に関する授業を重点におき、子どもたちが自らの生活をふり返ることができる授業作りを行っていく。 登校しぶりや児童同士のトラブル、いじめについては、今後も全職員が一丸となって取り組み、ケース会議を活用して職員の共通理解を図っていく。地域の方へのあいさつについては、家庭との連携を図りながら進めていきたい。
	Ⅲ ・いじめを許さない児童の育成 ・気持ちのよいあいさつができる児童の育成	・校内いじめ対策委員会の実施 ・児童アンケート・教育相談・ケース会議の実施 ・児童会によるあいさつ運動実施	児童⑧友だちや先生、地域の人に元気のよいあいさつや返事をしている。 保護者⑤子どもは、家庭や地域で、元気のよいあいさつや返事ができている。 保護者⑰学校は、いじめ問題をはじめ、子どもの困り感や悩みなどを理解し、誠実に答えようとしている。 職員６－④支援の必要な児童に対して、ケース会議などを適時もつことができたか。 職員６－⑤学校生活アンケートなどで児童の様子を把握し、適切な指導ができたか。 職員６－⑥児童の問題行動やいじめに対して危機意識をもち、組織的に対応することができたか。	##	A	児童の質問「友だちや先生、地域の人に元気のよいあいさつや返事をしている」に対する肯定的評価は91％と高い。保護者の質問「子どもは、家庭や地域で、元気のよいあいさつや返事ができている」に対する肯定的評価は72％と児童の結果と比べて意識の差が大きい。 保護者の質問「学校は、いじめ問題をはじめ、子どもの困り感や悩みなどを理解し、誠実に答えようとしている」に対する肯定的評価は61％と低く、職員の質問「学校生活アンケートなどで児童の様子を把握し、適切な指導ができたか」に対する肯定的評価は78％となった。児童にアンケートをとり、組織的な対応をしているものの、児童の様子を把握したり、児童に寄り添った適切な指導をしたりすることについては、課題があると感じている保護者が多い。これからも保護者に丁寧な説明をしていくことが求められる。	B	【箕作】・朝のあいさつするも返答する者が約4割くらいと思われる。声が小さく本人はしているつもりかもしれないが、こちら側には伝わらない。北山の集団は、大きな声でいつも気持ちが良い。家庭での保護者の態度如何と推測される。評議委員会で申し上げたあいさつの真意を玩味して心に留め、指導してほしい。 【古川】見守り隊をしていますが、あいさつについてはよくできていると思う。 【甲田】・ある学年の男子児童がいじめにあっていたがなかなか解決せず、警察が学校へ来たり、児童の家へ先生が行くといった話を聞いた。娘も相談にのったりしたが、もう少し早い対応ができなかったのかと、残念に思う。・あいさつは元気な声でできていると思う。 ■集団で登校であいさつができない子がいるのは残念だが、登校班によっては、大きな声でいつも気持ちが良い所もある。あいさつについては、これからも学級で指導していただきたいと思う。あっていけないことだが、いじめがあったときには素早い対応をしていただきたい。思いやりや豊かな心は、家庭教育の問題と思う。	【小林】・外部講師を積極的に取り入れる。 【綱澤】・子どもは、大人が考えるよりも体力がある。いっぱい運動し、疲れて眠る方が向上につながることだと考える。 ・マラソン大会や駅伝など、チームで行ってはどうか。地域にも応援してもらう場を作る。 【甲田】・スポ少に入る児童が減っているので、各部の指導者に来ていただき、交流できる場を設けて欲しい。 ■体力テストの結果を分析し、今年度の成果を把握した上で、来年度の取組の改善を図りたい。日々の体育の授業の中で、体力向上に関する取組を全学級で行うようにしていきたい。そのために、体育担当が中心となって定期的に声かけや情報提供を行い、職員の意識の向上を図りたい。
体力の向上と健康の維持	重点 Ⅰ ・児童の体力を向上させるための指導方法の工夫改善	・できる喜びを実感できる体育指導の工夫 ・授業外での自主的な体力づくりの場の設定（業間体育実施、チャレンジランキングへの参加）	児童⑮学校や家で、外遊びや運動をしている。 保護者⑨子どもは、進んで運動に取り組み、健康に育っている。 職員３－①体育の授業では、さまざまな運動を児童が楽しみ、できる喜びを実感できる指導ができたか。 職員３－②体育の授業の導入時に、体力向上のため、サーキットトレーニングを実施できたか。 職員３－④体力テストの結果を分析し、指導に生かしたか。	##	B	児童の質問「学校や家で、外遊びや運動をしている」と、保護者の質問「子どもは、進んで運動に取り組み、健康に育っている」については、肯定的評価が昨年度より高い状態にある。しかし、授業の導入時に、体力向上のため、サーキットトレーニングを実施したり、体力テストの結果を分析し、指導に生かしたりすることにおいては、肯定的評価が50％台と職員の評価が低い状態にある。 年度はじめの職員対象サーキットトレーニング研修をビデオ型の研修に変えたが、運動目的の理解と器具の使用については、不十分だった。また、体力テストの結果をもとに指導に生かす取組も不十分だったと思われる。来年度に向けて、今年度の結果をもとに体育担当を中心に取組及び指導計画の見直しをしていくことが必須である。	B	【小林】・業間チャレンジやサーキットトレーニングは良かった。 ・体育の授業もいろいろ工夫されていて、児童も楽しく過ごしている。（2年） 【綱澤】・体力向上において業間チャレンジなど、よい案を出されている。続けるべきだと思う。職員アンケートは、低すぎるため、改善を求める。 【甲田】・外遊びをする児童が減っていると聞くので、体育の内容を工夫してもらいたい。 ■体力向上において業間チャレンジなど、よい案を出されている。今後も子ども達の体力向上に向けたいろいろな取組を、継続してほしい。体育の授業についても、体育の内容に工夫をこらして体力向上に努めてほしい。	
	Ⅱ ・心身ともに健康な体と態度の育成	・熱中症や感染症の予防に関する手洗いや換気等の指導 ・スマホやネット、ゲーム依存未然防止のための取組 （メディアコントロールカードや学校保健委員会を含む） ・タブレット使用時等の姿勢についての指導	児童⑲家でスマホやゲームの時間やルールを守っている。（スマホやゲームがない人は答えなくていいです。） 児童㉗感染症予防に向けて、手洗いや換気を意識している。（気をつけている。） 保護者⑯家庭では、スマホやゲームの時間やルールを子どもと決め、それを子どもが守っている。（子どもに持たせていない場合は、空欄のまま） 職員３－⑤熱中症や感染症の予防に関する手洗いや換気等など、健康に関する指導ができたか。 職員３－⑧児童の発達段階に合わせたスマホやネット、ゲーム依存未然防止に関わる取組ができたか。（タブレット使用時等の姿勢、メディアコントロール、学級懇談等での話し合い）	##	A	児童の質問「家でスマホやゲームの時間やルールを守っている」に対する肯定的評価は81％、保護者の質問「家庭では、スマホやゲームの時間やルールを子どもと決め、それを子どもが守っている」に対する肯定的評価は66％と、児童と保護者の意識の差が大きい。昨年度との比較も児童は5．5ポイント、保護者も7ポイント下がったことを考えると、今後も学校からの発信としては、アンケート結果を伝え、家庭での取組を考えていただく必要がある。 換気や手洗いについては、児童と職員とも肯定的評価が90％を超える高い値となった。外から室内へ戻ってきた時や給食の前、トイレの後など、普段からの声掛けや実践が児童への意識として身に付いてきていると考える。	A	【箕作】・継続して行ってほしい。 【寺元】・スマホ・ゲームに対する取組は、本当に難しいと思う。家庭での連携が重要。 【甲田】・スマホやゲーム機など持っている児童が多く、使い方を知らずにトラブルに巻きこまれる気がする。特に（SNS）については、学校での指導、懇談、茶話会などで情報共有して欲しい。 ■スマホ・YouTube・ゲーム等、情報が子どもの身近に溢れている。スマホやゲーム機など持っている児童が多く、使い方を知らずにトラブルに巻きこまれる気がする。スマホ・ゲームに対する取組は、本当に難しいと思う。家庭での連携が重要であると思う。特に（SNS）については、学校での指導、懇談、茶話会などで情報共有して欲しい。	
家庭・地域・こども園・中学校との連携の推進	Ⅰ ・こども園・中学校との情報共有と交流推進	・中学校・こども園との情報共有と共通理解（各種連絡会・接続カリキュラム・トライアングルみまさかなど）	職員８－④接続カリキュラム（こ小）を見直し、実態に合ったカリキュラムで指導できたか。【1年担任のみ】 職員８－⑤「トライアングルみまさか」では、各部会で情報共有と共通理解を図ることができたか。	##	B	職員の質問「接続カリキュラム（こ小）を見直し、実態に合ったカリキュラムで指導できたか。【1年担任のみ】」の肯定的評価は高い。今後も今までと同様、こども園との接続カリキュラムの作成を計画的に行っていくことで、こ小の連携をさらに深めていくことができると考える。 また、「トライアングルみまさか」では、各部会で情報共有と共通理解を図ることができたか」の肯定的評価においては、各部会ごとに、こ小中の連携を図ることができたものの、各校園の取組方の温度差を感じている。そこで、トライアングルみまさかの取組については、校長会や運営委員会でよりよい取組になるよう働き掛けていく。	B	【小林】・学校間での情報共有はできていると思うが、保護者・地域間ではできていないのかなと感じる。 ・こども園・中学校の保護者との新しい交流の場があれば良いと思う。 ■学校間での情報共有はできていると思うが、保護者・地域間ではできていないのかなと感じる。トライアングルみまさかの取組においては、今後とも情報の共有と共通理解を進めていってもらいたい。こ小の連携や小中の連携を取ることで、学校間のつながりがスムーズに行えるように取り組んでほしい。	【小林】・HP（ホームページ）やSNSを利用 ・2区Pのバレーボールを変更し、フリマやワークショップ形式で行う。 ・PTA評議委員会に地域コーディネーターやCSメンバーも参加可能にする。（、地域の声を取り入れるため） ・令和6年学校評議委員を一新させ、先生の負担を減らしていきたい。
	Ⅱ ・保護者や地域との積極的な連携と情報発信	・行事の場や通信を利用した教育方針の伝達、説明 ・美作北小学校支援ボランティア等の地域の人材や施設・環境等の積極的活用 ※学校支援ボランティアは、今後「地域学校協働活動推進スタッフ」となる	保護者⑱学校は教育活動の内容を学校だより・学年通信やメール、地区懇談会などで知らせている。 保護者⑳美作北小学区では、子どもたちのために家庭・地域・学校が連携を図るよう努力できている。 職員５－②懇談会や通信などで、教育方針を地域や保護者に伝えることができたか。 職員５－③地域の学校支援ボランティアの活用はできたか。（黒豆作り・野菜作り・家庭科実習補助・読み聞かせなど）※新型コロナ対策による未実施の内容は除く。	##	A	保護者の質問「学校は教育活動の内容を学校だより・学年通信やメール、地区懇談会などで知らせている」の肯定的評価は昨年度と同様93％と高く、学校だよりやメールでのお知らせが必要に応じてできている。ボランティアの活動も新しい教育活動へも参加していただくことができたのは、良かった。 しかし、保護者の質問「美作北小学区では、子どもたちのために家庭・地域・学校が連携を図るよう努力できている」と、職員の質問「懇談会や通信などで、教育方針を地域や保護者に伝えることができたか」の肯定的評価は70％台と低くなっている。コロナ禍を過ぎても、児童の様子について話し合うような学級懇談の回数が少ない状況があったからと考えられる。	B	【綱澤】・「接続」とは、集中力だと考える。70％台は低すぎる。集中力は、習い事・暗算、教員の工夫だと考える。 【箕作】・教育の目的は、「禍福終始を知って、疑わざるがためなり」。よって、社会と乖離することがあってはならない。社会あっての学校である。 【寺元】・自治会の回覧板にも「学校だより」を回しているのはとても良いと思います。 【甲田】・今年度は、ボランティアも少しずつ参加できるものが増えて良かった。・教育方針を保護者に伝える手段として、参観日後の懇談を再開して欲しい。 ■学校は、地域と乖離することがあってはならないし、地域あっての学校であることを大事にしてほしい。そのためのPTA活動や地域学校協働活動等はとても大切である。今年度は、ボランティアの活動も少しずつ参加できるものが増えて良かった。教育方針を保護者に伝える手段として、参観日後の学級懇談を再開してほしい。	・今のメンバーは、学校支援ボランティアとして活躍してもらいたい。 【甲田】・第一小学校や他の小学校では、HPがあるので、作ってもらえると保護者がもっと興味を持ち、積極的な連携につながると思う。 ■トライアングルみまさかにおいて、児童・生徒の情報交換をするとともに指導における連携を図っていきたい。こ小の連携は「接続カリキュラム」に沿った指導

A：十分達成できた　80%以上
B：ほぼ達成できた　50%～79%
C：達成できなかった 49%以下

達成率：A：自己評価は適正である。
B：自己評価は適正でない。
C：わからない。